２０２３年（令和５年）　８月１３日　日曜日

東奥日報　１１面　掲載

全国高校野球選手権大会 第105回 第7日

光星初戦快勝

砂子田 流れ呼ぶ先制打

全国高校野球選手権大会第７日は12日、甲子園球場で２回戦４試合が行われ、八戸学院光星や前回大会王者の仙台育英（宮城）、土浦日大（茨城）、専大松戸（千葉）が３回戦へ勝ち進んだ。八学光星は主戦の２年生左腕洗平がノースアジア大明桜（秋田）を完封。五回に砂子田の中前２点適時打で先制すると、七回は藤原が３点本塁打を放つなど７－０で快勝した。仙台育英は前回４強の聖光学院（福島）を序盤からリードし、８－２で下した。土浦日大は大井の本塁打で先制して３投手が反撃を封じ、九州国際大付（福岡）に３－０で勝利。今春の選抜大会８強の専大松戸は東海大甲府（山梨）に７－５で競り勝った。

藤原 7回に豪快3ラン

【評】八学光星は投打がかみ合い快勝した。四回まで無安打に抑えられていた打線は五回、7番青木のチーム初安打を足掛かりに1死二、三塁の好機をつくると、1番砂子田が中前に2点適時打を放ち先制。さらに3番中澤恒の左中間を破る二塁打で1点を加え、試合の主導権を握った。

3－0の七回は2四球で2死一、二塁とし、5番藤原が左翼席に3点本塁打を放った。八回にも2番西尾の左犠飛で1点を追加。5安打ながらボールを見極めて得た11四死球などで、一、四、九回以外は得点圏に走者を置き、プレッシャーをかけ続けた。

投げては主戦洗平が被安打4で完封。序盤こそ制球が乱れピンチを背負ったが立ち直り、粘投した。3併殺を奪うなど要所での守備も光り、隣県対決を制した。

洗平が粘ってくれた

八戸学院光星・仲井監督 「洗平は独特の雰囲気と実戦から離れていたことで制球を乱したが、粘り強い投球をしてくれた」

一球で仕留められた

ノースアジア大明桜・輿石監督 「五回まではうまくいった。（八戸学院光星は）一球で仕留めるバッティングがトップクラスだった」

「しっかり捉えた」

主将・中澤恒
適時二塁打

五回に左中間へ適時二塁打を放った八学光星の3番中澤恒。県大会決勝では5打数無安打に終わり悔しさをにじませたが、「しっかりボールを捉えることができた。一打でチームに流れを持ってくることができてよかった」と安堵（あんど）の表情を浮かべた。

この日は守備でも正確なスローイングで2併殺を奪った。「ピッチャーが制球に苦しんでいる中でのゲッツーだった。ピッチャーを少しでも楽にできたのは大きい」と自らを評価した。

一方、主将としては「初戦で気持ちが高ぶり、みんな自分のプレーができていなかった」と厳しい目で試合を振り返った中澤恒。「好投手がそろう甲子園では簡単には打てないが、今日で球場の雰囲気に慣れた。次戦は冷静に攻めていきたい」と意気込んだ。（棟方好華）

ヒーロー 好機「気持ち入った」 砂子田

勝利への口火を切る一打だった。0－0で迎えた五回1死二、三塁、1番砂子田（2年）が真ん中高めのスライダーを中前にはじき返すと、走者2人がかえり、待望の先制点となった。この一打を皮切りにチームは計7得点。「自分が決めるしかないと気持ちが入った。一振りで流れを呼び込めたと思うとうれしい」と笑顔がこぼれた。

県大会ではチームトップの5割2分9厘をマークした。ボールへの対応力アップを目指し、大阪入り後の練習でフォーム改良に取り組んだ。ステップ幅を少し狭めることを意識し打撃練習に励んだが、うまく打てない。不調に陥った。初戦を目前にしても調子が上がらず「スタメンに入れるか迷った」（仲井監督）。それでも初戦前日の練習からようやく感覚をつかみ、スタメンに起用された。「昨日（11日）もたくさん打撃練習に取り組んだ。自信を持って打席に立つことができた」

五回、青木の右前打や四球で無死一、二塁とすると、前を打つ洗平が犠打を決めた。「（洗平）比呂が自分を犠牲にしてバントをしてくれた。比呂を援護するため、自分は思い切りスイングするだけだった」。殊勲打の砂子田は塁上で右手を突き上げ、喜んだ。

2年生、初めての甲子園。2打席目までは「緊張から動きが硬くなり、甘いボールが来ても振ることができなかった」と反省しつつ、「一本出て気持ちが楽になった」。3年生と1日でも長く野球するため「自分がチャンスメークしていく」。（棟方好華）

青木躍動

チーム初安打に好走塁

八学光星の7番青木が五回にチーム初安打を放ち、湿っていた打線に着火した。先制のホームも踏み、「ベンチでは自分が初ヒットを打つと言っていた。思った通りにいった」と充実感に浸った。

甲子園球場は投球が見えやすく、「打つ自信があった」という。変化球を引っ張った打球は一、二塁間をしぶとく抜けた。八回の三塁走者の場面では、浅めの左飛で捕手のタッチをかいくぐり生還。打と走で勝利に貢献した。

県大会では4死球、この日も2死球を受けたが「痛いけど出塁できるからうれしい」と笑う。3回戦に向け「当てられてもいいから塁に出たい。下位打線からチームを勢いづけて、上位に回したい」と必勝を誓った。（本田海輝）

これぞ「打の光星」 藤原一発

3点リードの七回、2死一、二塁の好機。八学光星の藤原がゆっくりと右打席に入った。2－2からの5球目を強振すると、高々と上がった打球はレフトスタンドへ。「打の光星」を体現し、勝利をぐっと引き寄せる一撃となった。

後輩の2年生左腕・洗平が好投を続け、捕手として「洗平が頑張っていたから、どうしても打ちたかった」と藤原。「狙っていた」という高めの直球を捉えた。1万1千人の観衆が沸く中、人さし指を突き上げてダイヤモンドを一周。ベンチでは洗平が両手を上げて喜んだ。

身長170㌢と小柄ながら、県大会でも2本塁打、チームトップの11打点とパンチ力がある藤原。甲子園でも好調を維持しており、この日は扇の要としても先発洗平を好リードするなど奮闘した。8強入りが懸かる次戦に向け「きょうの1巡目の打撃を反省して、油断せずに戦いたい」とチームの思いを代弁した。（本田海輝）

途中から慣れてきた

八学光星・中澤恒主将 「初戦でみんな緊張していたが、甲子園の雰囲気に途中から慣れてきて自分たちの野球ができた」

「ナイスやった」

光星・留守部隊 笑顔で大声援

八戸市の八戸学院光星高校では12日、女子バスケットボール部や卓球部などの生徒や教職員ら約30人がオープンスペースに設置された大型スクリーンで試合を観戦し、ナインに声援を送った。

生徒たちは赤いスティックバルーンを両手に持ち、選手の名前を呼びながら「いいよ！」「ナイス」と笑顔でエール。五回に砂子田の適時打などで3点を奪うと、バルーンを打ち鳴らして喜びを爆発させた。試合終了の瞬間は「わー！」「やった」と両手を高く上げて歓喜。スクリーンに映ったナインと一緒に校歌を歌い、拍手を送って熱闘をたたえた。

バスケットボール部の千葉雪華（はな）さん（3年）は「序盤は得点が入りそうで入らない展開だったけれど、一つ一つのプレーをしっかりやって流れを引き寄せた」とたたえた。

学校関係者と観戦した西塚陽太（ひなた）君（同市町畑小3年）は「藤原君のホームランがすごかった。勝つと思っていたのでうれしい」と笑顔だった。（千葉真由美）

熱く 燃えろ 八戸学院光星
初戦突破おめでとう！
八戸学院光星

大型スクリーンに映し出されたナインとともに校歌を歌い、初戦突破を喜ぶ生徒たち＝八戸学院光星高校

東奥日報社提供

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです